



|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | It's fun shaving dogs. の構造について  |
| Author(s)        | 葛西, 清蔵  |
| Citation         | 北海道大學文學部紀要, 41(3), 91-104   |
| Issue Date       | 1993-02-26  |
| Doc URL          | <a href="http://hdl.handle.net/2115/33612">http://hdl.handle.net/2115/33612</a> |
| Type             | bulletin (article)  |
| File Information | 41(3)_PL91-104.pdf  |



[Instructions for use](#)

## It's fun shaving dogs. の構造について

葛 西 清 蔵

0. 小稿は表題の構造がもつ二つの点を検討しようとするものである。

0.1 まず、この構文に関連してつぎの例文をみよう。

1. a It worries all of us that John likes Mary.
- b It would worry all of us for John to dislike Mary.
- c \*It worries all of us John's disliking Mary.

これらの文は、[John が Mary をきらう] ことを It を主語とした that 節、to 不定詞の構文は許されるが、動名詞では許されないことを示している。また 1. c の文に対し

2. a It's useless talking to him.
- b It's hard living in this city.
- c \*It was a shame Max's getting arrested.
- d \*It annoys me John's playing golf.

2. a, b が可能であるが、2. c, d が不可能であるところから、一般には、この構文では、「動名詞は主語をもつことはできない」と考えられている。

3. a It's no use your complaining to the boss.

b It's no good our going on like this.

しかし、ここでは動名詞に *your* , *our* と動名詞の意味上の主語があるにかかわらず許されている。いずれにせよ、「その動名詞に主語があらわされていると非文法文となるか、または文法性が低下する」(荒木)<sup>(1)</sup>という表現は、どの場合に非文となり、どの場合に文法性が低下するかについて明確ではない。これが問題点の一つめである。

0.2 つぎの問題点は、この構文の述語についてである。

Pellum は 3. a, b の *no use* , *no good* とつぎの文,

4. a \*It'll be *useful* my talking to him about it.

b It is *useless* my talking to him about it.

4. a, b の *usuful* , *useless* の対比から、この構文の述語は「否定性を含む特性」(peculiar properties involving negativities)をもたなくてはならないという。

しかし、つぎの例をみると、この言い方は適切ではない。

5. a \*It's *out of the question* going out this evening.

b \*It's *illegal* shaving birds.

c \*It's *important* saving money.

d \*It always *exhausts* me climbing that mountain.

e It's *ridiculous* working so late at night.

f It's *fun* shaving birds.

g It's *nice* saving money.

5. a, b は否定的な意味をもっているのに非文である。Hudson は 5. e, f, g などの例から「述語が「感情的反応」(emotional reaction)を表すもので

なければ、主語として働く動名詞は外置して文末におくことはできない」という。一方では「否定的」といい、また一方では「感情的反応」という。

この構文の述語はいったいどういう性質をもっているのか、またそれはこの構文にどういう関係をもっているのか。これが二つめの問題である。

1. まずはじめに、この構文の一般的な性格をみ、つぎに二つの問題点の検討にはいることにする。

もともとこの構文は、その許容のされかたについても明確なわけではなく、6. aの文は「口語以外ではあまり普通でない」(Quirk et al. 1972 p. 964)のであり、また6. bは「形式ばらない」ものだという。

6. a It was easy getting the equipment loaded.

b It's no use telling him that.

しかし、このときでも動名詞がこの位置にあるのは「不完全にしか受け入れられない」(p. 964)という。したがって、この構造はもともと不安定なものである。

動名詞がこの位置にくることについては、これが自然でないことは次の例でもわかる。

7. a It's fun being a HÒSTESS.

b It's FÙN being a HÓSTESS.

7. a, bのようにストレスをおくと、自然な形は7. aではなく7. bである。そして、being以下は「主な情報の焦点」(main information focus)(Quirk et al. 1972 p. 964)をになわない。7. bは許容されるが、ここでは、FUNがストレスをもち、主張となっており、being以下はむしろ、非焦点化(defocus)されている。6, 7の文から、

8. この構文では、文尾におかれた動名詞は、主張とはならず、むしろ旧情報をにやう部分として付けたされたものである

ということができよう。このことはつぎの事実からも確認できる。

9. a Having nude scenes on the stage is normal nowadays.  
b \*It is normal nowadays having nude scenes on the stage.  
cf. c To have nude scenes on the stage is normal nowadays.

9. a のように動名詞が主語位置にある文は許容されるが、9. b のように文尾に外置されると非文となる。これは主語がもともと話し手、聞き手の間で了承された古い情報がくるべき位置であり、動名詞がすでに起きたことを表わす古い情報をにないやすいために9. a は安定した構造をつくり、許容されていると考えられる。9. c の不定詞主語の場合よりも、9. a の動名詞主語のほうが「よりいっそう自然」(Hudson p. 178) というのは、「動名詞はもともと過去の事実を指向し、不定詞が未来を指向する」(cf. Celce-Murcia / Larsen-Freeman p. 434 cf. I remember to post / posting the letter.) からである。

9. b が非文になるのは、本来、文頭の主語位置にあるべきものが、文尾に外置されたためと考えられる。

さらに、これを支えるもう一つの事実をみよう。

10. a It is fun to kiss Gladys.  
b It is fun *kissing* Gladys.  
11. a Who is it fun to kiss ?  
b \*Who is it fun *kissing* ?  
12. a It was hard *living* in the city.  
b It is hard to *live* in the city.  
13. a \*The city was hard *living* in.

b The city was hard to live in.

10. a, b はいずれも許容される。しかし11. a, b の対比にみるように、11. a のような不定詞句からの抜きだしは可能であるが、11. b の動名詞からの抜きだしはできない。一般に要素の移動が可能なのは主張部分からであり、前提部分、旧情報として了解されている部分からは、要素の移動ができないから、ここでもやはり、動名詞部分は事実的であり、前提部分をなしていると考えることができる。これは12. a, b でも同様である。

最後に、もうひとつの事実をみることにしよう。

14. a \*It was understandable John's owning two cars.

b It was understandable, John's owing two cars.

14. a では動名詞は意味上の主語を含んでおり (1. c, 2. c, d も同様) 非文となっているが、これを14. b のように、意味上の主語の前にコンマをいれると許容される文となることはよく知られている。(発音するときには a commalike pause (Emonds p. 42) となる。)

Hudson はすでにあげた非文、

15. (= 9. b) \*It is normal nowadays having nude scenes on the stage.

についてふれ、Hudson 自身は外置 (extraposition) と同格 (apposition) を区別する (p. 178) という。<sup>(2)</sup>そしてこの区別は、第一に「内部境界」(an internal boundary) があるかないかによるのであって、境界があれば同格の例であり、許容される文となる。さらに、同格の文はつぎの16の文と「まさしく同じ構造をもつ」(p. 179) という。

16. They're rather expensive, those geraniums.

「内部境界」があるということが、その文が許容されるか、どうかをきめることになるが、ここで切れ目があるということは、それ以降が本文と構造を作っていないことをしめす端的な証拠であると思われる。

動名詞以下が「主な情報の焦点」をもたないとしてさきにあげた、

17. a (= 7. b) It's FUN being a HÓSTESS.

b It's fun, being a hostess.

17. a の文について、Quirk et al. 1972 は 17. b のようにコンマをつけることができるという、この文は、

18. *He's a friend of mine, that man.*

18 の「真の外置された主語」( a genuine extraposed subject ) ほどに、*that man* という「名詞句付加」( a noun phrase tag ) ( p. 964 ) と「つよい類似性」( much affinity ) をもっていることを指摘している。これは、Hudson が 16 の *those geraniums* についてのべた「まさしく同じ構造」と全く同じ主旨のものである。

いずれにせよ、コンマ以下のこの部分は「文の不可欠の部分であるよりは、付けたし」( Celce-Murcia / Larsen-Freeman p. 418 ) であり、「別の発話」であって、「ピリオドが好まれる」( Jespersen 1961 p. 357 ) という性質のものである。ここでもまた、

19. この構文は口語的な表現であり、動名詞以下はその文の主たる部分ではなく、補足的な部分をなしているにすぎない

ことがこの構文のきわめて重要な特質として指摘できる。

以下、このことをふまえて、最初にあげた二つの点について考えることにする。

It's fun shaving dogs.の構造について

2.1 まず、一つめの「動名詞に意味上の主語があると許容度がさがる」ということについて。

まずつぎの例をみよう。便宜のためにくりかえす。

- 19. a \*(= 2. d) It annoys me *John's* playing golf.
- b \*(= 2. c) It was a shame *Max's* getting arrested.
- 20. a (= 2. a) It's useless talking to him.
- b (= 2. b) It's hard living in this city.
- 21. a \* It's great fun *his* swimming there.
- b \* It would be useless *my* talking to Mervin.
- 22. a \* It is no use *your* complaining to the boss.
- b It's no good *our* going out like this.
- c It's useless *my* talking to him about it.

ここの例でも見るように、動名詞の意味上の主語がないと許容される。意味上の主語が固有名詞の場合には、きまって非文になる。代名詞の場合には許容されたり、されなかったりで、ここに例からだけでは、その違いの理由がはっきりしない。ストレスのあるなしが、かかわるはずである。(興味ぶかいが論旨に直接影響しないので、これ以上たち入らない。)

しかし、これらの例をみるかぎり、つぎのことは、明確である。

意味上の主語がつぎの順で、許容度がたかくなる。

23. 固有名詞<代名詞<主語なし

この順序での許容度のちがいはどのような意味をもつのであろうか。

結論を先取りすれば、このことは明白につぎの事実にかかわりをもつと思われる。



24. a Who did you see *a* picture / pictures of?  
b ? Who did you see *the / that* picture of?  
c \*Who did you see *John's* picture of?

ここではつぎの順で許容量がかたくなっている。

25. John < the / that < a / 限定詞なし

24の文は「指定主語条件」にかかわるものであるが、この条件の意味を問うことがわれわれの一つめの問題の鍵になると思われる。これに関連してつぎの例をみよう。

26. a I gave John *a* picture of himself.  
b ? I gave John *that* picture of himself.  
c \*I gave John *Mary's* picture of himself.

23と25ははっきり平行している。「指定主語条件」はNPまたはS内の要素をその外の要素と関連づけてはならない、というものであるが、次の27の例も主旨はこれと同じものである。

27. a A man just left who was wearing a hat.  
b ? *The* man just left who was wearing a hat.  
c ?? *That* man just left who was wearing a hat.  
d \**John's* brother just left who was wearing a hat.

27では問題の個所が、主語となっており、それにつく関係節が右方移動されている。

つぎの例はどうであろうか。

28. a A man just came in who was wearing very funny clothes, wasn't he / \* didn't the ?  
b A man who was wearing very funny clothes came in, \* wasn't he / didn't he ?

付加疑問文は主張部分につくものであるが、28. a, b では主張部分がちがう。28. b では who 節が主張部分となっていないが、文尾に移動された28. a では who 節が主張部分になっている。この例でもわかるとおり、文尾には主張たる焦点が来るのが普通であるが、これらのことははっきりつぎのことを示している。

29. 文尾の焦点のほかに、固有名詞のような特定の、意味的に優位になりやすいところがある。(3)

24, 26では文尾の NP 内にそれぞれ wh-, himself という焦点になっている部分と、特定の固有名詞があるし、27では文尾の who 節の主張部分にくわえ、主語としてもう一つの特定の固有名詞があることが、非文の原因になっている、といえる。ここでふたたびつぎの例文をみてみよう。

30. a \* It was wrong *Jim's* doing that.  
b \* It's hard *my* living with witches.  
b' It's useless *my* talking to him about it.  
c It's hard living in this city.

30. a では主張部分が was wrong であり、Jim 以下は付けたしの部分であるが、その付けたしの部分に固有名詞 Jim がある。代名詞はまさに代名詞であるということによって旧情報をつたえ、ストレスがなければ、焦点にならず許容される文となる。固有名詞はそれ自体がまさしく旧情報でないことを示しており、意味的に優位な個所となる。すると、一つの文のなかに、焦点

のほかに、意味的に優位な個所がもう一つあることになり、これらが衝突して非文をつくることになる。このように、

31. 表題の文は、述語部分が主張になっているが、動名詞に固有名詞（またはストレスのある所有代名詞）などの意味上の主語がつくと、その部分が意味的に優位になり、その部分と主張部分が衝突して非文となる。

これが一つめの問題に対する解答である。固有名詞の前にコンマがあれば許容されるのは、コンマがあると、もはや固有名詞以下は文とは別の要素となるからである。

2.2 つぎに、二つめの点。この種の構文の述語は「感情的反応」、「否定的な意味」を表すという点について考えてみよう。

まず、この構文の述語を見てみよう。

32. a Going out this evening is out of the question.  
b \*It is out of the question going out this evening.
33. a Saving money is important.  
b \*It is important saving money.
34. a Climbing that hill always exhausts me.  
b \*It always exhausts me climbing up that hill.
35. a Shaving birds is illegal.  
b \*It is illegal shaving birds.
36. a It is normal nowadays having nude scenes on the stage.  
b \*It is regrettable having nude scenes on the stage.
37. a Getting the equipment loaded is easy.  
b It was easy getting the equipment loaded.

以上の例文が許容されるかどうかから、この構文の述語についてわかることは、「述語の意味そのものだけでなく、動名詞が外置されて文尾にあることがかかわっている」ことである。

以下この点を糸口にして考えていくことにする。

すでに、表題の構文において、動名詞は付けたしの旧情報として、文尾におかれた構造であることはみたが、これを話し手の側からは、つぎのようにいうことができる。

話し手は、常に、心のなかで優位なものをまず発する傾向がある (Jespersen, 1976 p. 99) が、動名詞や不定詞の場合には、これを「通常の位置」(usual position) におかず、そのかわりに代名詞 *it* をおくことが便利である (cf. Jespersen, 1976 p. 154)。口語的であれば口語的であるほど、「代名詞で先にいってしまい、突然、自分で意図する指示物について、聞き手が知らないことに気が付き、*it* の内容をあらためて付加える」(Rodman) ことになる。人は発話するとき、一番伝えたい主張の部分は統語的な方法、音声的な方法によって焦点にする。同時にそれは焦点でない部分をよわく (defocus), 付けたしの的にいうことになる。この点から考えると、つよい口語的な表題の構文は、つぎのような性格をもつといえるだろう。

- 38. a 述語部分がかつとも主張したい部分である。動名詞の部分は付けたしであり、追加表現である (動名詞が文尾)
- b *it* は話し手のなかで、話題となりうるもので、前提として考えられたものであり、述語部分は、その話題にたいする即座の判断、評価の表現ある (述語の性質)

以下このことを検証してみよう。

- 39. a Going out this evening is out of the question.
- b \*It's out of the question going out this evening.
- 40. a Climbing that hill always exhausts me.

- b \*It always exhausts me climbing that hill.
41. a \*It's illegal shaving birds.
- b \*It's important saving money.

37. b, 38. b, 40. a, b のように動名詞が主語として文頭にある場合には許容されるが、動名詞が文尾にあると非文になる。非文をつくる述語 (out of the question, exhaust, illegal, important) をみると、これらは、動名詞でしめされる内容にたいするかなり冷静、かつ反省的で客観的な判断をあらわす述語である。

これに対し、いま表題の構文におこりうる述語をあげてみよう。

42. great fun, nice, regrettable, hard, useless, wrong, easy, no use, no good, wonderful, not worthwhile, really worthwhile, awkward, all right, a great pleasure, pleasant, hopeless, extravagant, a sad thing, a real shock

一見ただけでも、動名詞が外置された場合におこりえない述語とは著しい対比をなすことがわかる。42の述語はいずれもきわめて主観的な判断をあらわすものである。

この点で Hudson の「主観的な反応」をあらわす述語がこの構文につかわれる、という言い方は正しい。

このことは、命題内容に対する話し手の判断をあらわす「内容離接詞」(content disjunct) に類すると思われるつぎの文、(いずれも文頭に It is を付すことができる)

43. a *Pity* he didn't buy it.
- b *A wonder* he doesn't complain.
- c *A good job* they were insured.

などにみられる *pity, a wonder, a good job* はいずれも主観的な判断をあらわすものであることも支持されよう。

しかし *Pellum* のように、動名詞が外置された構文には「否定性」をふくむ述語しか認めない、というのは明白にいいすぎである。*fun, nice, easy, wonderful, worthwhile, all right* には少しも否定的な意味はふくまれていない。*Pellum* が否定性をあげたのには（ここでは立ち入らないが）別の理由があると思われる。<sup>(4)</sup>

いずれにせよ、表題の構文の述語についてはつぎのようにまとめ、二つめの問題に対する解答とすることができよう。

44. 動名詞を外置しない構文が文語的で、客観的な判断をあがわすものであるのに対し、動名詞が外置された表題の構文は口語的で、そこにつかわれる述語は反省的、客観的であるよりは、むしろ即座の反応をあらわす主観的なものである。

3. 表題の構文についての二つの疑問、すなわち、動名詞に意味上の主語がきにくいこと、述語の意味的な性質はなにか、について、一つめは、ひとつの文に焦点以外に、意味的に優位になるころがあってはならない、という機能的・意味的な理由があり、二つめには、この構文がきわめて口語的で、即座の主観的な判断をのべた文であることからくるものであることをのべた。

#### 註

- (1) これではどのような場合に、どの程度に許容度が変わるのがまったくわからない。われわれの求めるのは、どういう理由で、どんなものが許容されるのか、されないのかである。
- (2) *Hudson* が外置と同格を対比させ、同格と「同じ構造」をもつという16の例は、*Jespersen* (1976 p. 95) で外置の例としてあげている *He was a great novelist, that Charles Dickens.* と同じものであるから注意が要る。
- (3) *Chomsky* のいう「指定主語条件」は統語的なものであるが、この条件を支えているのは意味的なものであり、段階的なものである。これについては葛西 (1992) 参照。

- (4) この点について興味ぶかいのは、表題の文で *useful* は許容されないが、

1 Is it any use trying to pull him around?

が可能だということである。疑問の *any use* , 否定の *useless, no use* が可能であるということは、*use +  $\alpha$*  の場合だけ許容されるということである。これは *use* だけでは、この構文の述語として情報不足だということなのかも知れない。もしそうだとすると、*use + negativity* が許容されるというわけで、否定のものがきやすい、ということはある得だろう。

荒木一雄 (編) 1985 『英語正誤辞典』 研究出版

Celce-Murcia, M. / Larsen-Freeman, D. 1983 *The Grammar Book* Newsbury House Pub.

Chomsky, N. 1973 "Conditions on transformations" Anderseon / Kiparsky (eds.) *A Festschrift for Morris Halle* Holt Rinehart and Winston.

Declerck, R. 1991 *A Comprehensive Descriptive Grammar of English* Taishukan

Emonds, J. 1972 "A reformulation of certain syntactic transformations" Peters, S. (ed.) *Goals of Linguistic Theory* Prentice Hall, Ins.

Greenbaum, S. 1969 *Studies in English Adverbial Usage* University of Michigan Press

Hornby, A. S. 1976 *Guide to Patterns and Usage in English* Oxford Univ. Press

Hudson, R. A. 1971 *English Complex Sentences* North-Holland

Jespersen, O. 1961 *Modern English Grammar* George Allen & Unwin

..... 1976 *Essentials of English Grammar* George Allen & Unwin

葛西清蔵 1991 「いわゆる「指定主語条件」について」『函館英文学』 3

Lees, R. 1960 *The Grammar of English Nominalization* Mouton

Pellum, J. K. 1991 "English nominal gerund phrases as noun phrases with verb phrase head" *Linguistics* 29 763 ~ 799

Postal, P. 1974 *Raising* MIT

Quirk et al. 1972 *A Grammar of Contemporary English* Longman

..... 1982 *A Comprehensive Grammar of the English Language* Longman

Rodman, R. 1974 "On left dislocation" *Papers in Linguistics* 7 437 ~ 466

安井稔 (編) 1987 『現代英文法事典』 大修館

Ziv, Y. 1975 "On the relevance of content to form-function correlation" *Papers from the Paraception on Functionalism* CLS